

### 3.5 勾欄雜筆

『中央演劇』第四卷第二号 昭和十四年二月一日発行

文楽に関する随筆を書けとの御注文であるが、まだ若輩の私に随筆等書ける筈がない。あれやこれやと考えた上、旧臘三十日、文楽座の初春興行の総稽古を見聞しに行った時、客無しの寒い椅子席で、ポツネ見物して居る中に、初春狂言に因んだ事で取止めもなく頭に浮んだことを書く事とする。

まず入場すると、幕開きの「忠臣蔵」の『道行』が始まったところ、綴太夫と新左衛門がシンである。がほんとうの浄瑠璃のシンの小浪は、病氣回復した二枚目の伊達が、新左衛門の絃で語って居る。次が『九段目』で、前半が盲目の駒太夫、絃が清二郎、後半が大隅と広助、浄瑠璃の最高峰と云われる『九段目』を二分するなどけしからん事である、しかも、最も情の乗り切ったところ、「――途方に暮れし折から」で切れて、「東西、只今の次――」と、口上が入って、「――加古川本蔵が首進上申す――」となるのだから、堪らない、幕内はそれで治ったか知らぬが、治らないのは聴客の耳、その愚痴は置いて、盲目の駒太夫、中々よく語って居る、何時かも、紋下の津太夫の代役をした時、お客が口々に「駒はんも中々よう語るなあ」と言って居た事を、故石割松太郎氏が耳にして、この評言は、紋下の権威のない事を裏書きするものだ、と言って居られた事を思い出した。盲目で近世の名人は、何と言っても四代目の竹本住太夫であったそうだ。文楽座に居たのだが、越路（後の撰津）と紋下争いをして、新興のいなり彦六座へ行って、

その紋下となった人である。紋下に座って居て、やはりそれだけの芸に貫禄があったから、「忠臣蔵」が立つと『九段目』を語る。最ものお得意は、「大文字屋」で、今の道八が代役でその相三味線を勤めた時、高座でポロ／＼涙が出て来て、オイ／＼声が出そうになったと言う。この住太夫の相三味線は、二代目鶴沢勝七で、掛声のめっぼうよかった人とか、「妹背山」の『道行』のシンを弾いた時、勝七の掛声のために、お三輪の出の太夫の声が消えたとか言う咄であった。太夫は、若太夫の九代目（？）で、道行専門の人。

『九段目』がすんで、人形の栄三の部屋を訪ねると、「勧進帳」の弁慶の人形を拵えて居るところ、「今度は、お役が四ツで中々おえろおまんな」と、言うのと、「困ってまんねん、はなの由良之助か、切の団子屋かどっちか堪忍しとくなはれ、といいましたんやけど、どうしてもあきまへんね」と言う。「そやけど、まあ今度は、人形が皆一役一番宛だっさかいましたましたす。もう『忠臣蔵』の通しで、由良之助と勘平の二役は叶いまへん。由良之助が、『四段目』と、『茶屋場』が二番、『九段目』、『討入』と五番で、勘平が、朝（三段目のこと）の勘平に、獵人に『六ツ目』と三番で、つごう八番だっさかい、部屋一杯になります。これが、巡業やなんて来た日にゃ、やりきれまへん。」成程、人形だから芝居の様に扮装の手間は要らぬから簡単なものだと思いの外、幕間の手数は大した事はないもの、初日の開く迄の人形の準備や、右の様な沢山人形が要る場合の場所の取る事は、芝居以上である。一日の通し狂言で、種々の役の中、最も沢山種類の要る横綱は、「菅原」の通しで、菅相丞と松王丸である。相丞の方は、まず『大序』と『伝授場』が天人装束だが、昔は、品物のよいのと悪いのと二つ作って、使い分けをしたとの事である。勿論、『伝授場』の方によいのを使った。次が『道明寺』で、この段で、自身の相丞と、木像の相丞と二番、そ

れから『天拜山』で、大切が近頃めつたに出ない『柘榴天神』と、全部で六番、松王の方は、『加茂堤』の仕丁姿、『車曳き』、『賀の祝』、『北嵯峨』の忍び装束、そして、『寺小屋』では、首実験と、二度目の出と、段切の麻袴と三番要る訳で、合計七番となり、若し、相丞と松王の二役を一人で持つと、とても大変な事になる。

次の『日向島』までの間に、吉例手打の式がある。『日向島』は、紋下津太夫の役場、昔、鐘太夫が、元祖越前少掾の追善として上場して以来、青竹の勾欄を用うる慣例となったものである。青竹の勾欄と言えば九年前の昭和五年の一月、今の文楽座の柿茸落し興行に、「平家女護島」の二段目の『鬼界ヶ島』が出た時、青竹の勾欄を使用せんとしたのに対して、木谷蓬吟氏が、追善物の『日向島』に似て不吉であると言つて、横槍を出し、上方劇壇にかなりの問題が起きた事がある。が、青竹の勾欄に関する事は別として、往々にして、『俊寛』と、『日向島』とが相似したものととして、よく比較される事が、私は不思議で堪らない。この両者は、離れ小島に居る乞食と言う点だけは似て居るとしても、構想も作意も、それに第一浄瑠璃の曲風が丸きり違う。津太夫の『日向島』を聴いて居ても、また、九年前に『鬼界ヶ島』を復活させた古靴の『日向島』（この人は、まだ『日向島』は語らぬが）を聴いても、『鬼界ヶ島』の事等、みじんも聯想しないだろう。

近世で、この『日向島』のよかったのは、何と言つても初代の柳適太夫だったそうなの、灘の酒屋の旦那で、素人からの化物だが、何しろ、当時三絃の最古老であった西京建仁寺町の友治郎（五世）を、家に居候させて、一段の浄瑠璃を一年以上もかゝって上げたと言ふ、だいたい上品な語り口で、「橋供養」の『庵

室』や、「大塔宮」の「切子灯籠」等がお得意で、「良弁杉」の『二月堂』はこの人の書卸しで無類だったそうだが、中でもこの『日向島』は飛切りよかったらしい。

廊下で、バッタリ古鞆に会ったので、早速『日向島』の咄を聴く、「以前にあなたが聴かれた『日向島』の中では、誰方がよかったでしょうか」とたずねると、「東京の綾瀬はんや、播磨はんのも聴きました。うちの師匠（法善寺津太夫）も、芝居で語られましたが、これは聴けませぬ、どこか御座敷で聴かせて貰ったと思って居ります。それから、堀江座でしたかで、大隅師匠のを聴きました、が、やっぱり、これが一番結構でした」。との事である。声づらから言うと、『日向島』は、断然大隅のものではない、それが、一番よかったと言うのは、やはり、団平の指導と、大隅の必死の修業が、適不適を蹴飛ばしたと言うところであろう。調べて見ると、堀江座で、大隅がこの段を語ったのは、明治四十二年の一月である。当時、大隅は、糖尿病にか、って居たが『日向島』の役が付いたので、「あれ許りは、米の御飯を喰べさせて貰わんと、稽古がでけまへん」と、言ってきたと、その頃診察して居られた高安吸江博士が言って居られた。

お次が、近頃の文楽に取って、「忠臣蔵」以上の独參湯の「勸進帳」で道八の出し物、が、私が、この「勸進帳」を聴いて何時も疑問を懐くのは、今文楽で上演する「勸進帳」の三味線の譜と、これの書卸しの時、稲荷座で清水町の団平が弾いた譜とどれだけの違いがあるかと言う事である。因に、文楽座の「勸進帳」年表は、最初が、撰津の引退の時の大正二年四月で、三味線は吉兵衛（六世）、次が、大正十四年四月で、三味線は友治郎で、二回共不評であった由、そしてその次が、四つ橋文楽座の第二回目の興行、昭和五年の二月、道八の三味線で、大好評となった。何時もく、団平の「勸進帳」の事に就いて調べよ

うと思いつ、その俣になって居る。

次に、古鞆の「柳」があるが、寒くなったので失敬した。それにしても、初春早々古鞆に「柳」とは、大不服である。四年程前の五月に、廿年振りとか言つて語つた時は、丁度その前に、彼が南紀を旅行して、「棟木由来」の旧蹟等親しく見物して、帰阪したら、偶然にも、松竹から「柳」の注文が来たので、口のない品物だが、ポイと語る氣になった、と、確か手紙を貰つた。事があつたその時の、「柳」はとても面白いものであつたが、「柳」を、現今のように流行らせたのは、六代目の綱太夫が語つてからだそうだ。彼は、元左官屋で全身刺青の生粋の江戸っ児で、無類の美音家、「柳」を語る時、師匠で、「日本一滑稽物語」と大看板を掲げて居た山城掾（後山四郎）のチャリの語り口を、上手く取入れ、彼の木遣り音頭を、「わかのイ、うらんにゃ、めいーしょんがごしやる、——」と、鼻唄式に演つたので、大喝采となつたのである。

〔備考〕(1)・12 何時かも、紋下の津太夫の代役をした時、お客が口々に「駒はんも中々よう語るなあ」と言つ

て居た事を、故石割松太郎氏が耳にして、この評言は、紋下の権威のない事を裏書きするものだ、と言つて居られた事を思い出した。…大文字屋（駒道八）源路太夫が津太夫病氣で駒太夫が替り役を勤める口上を陳べて引込む。「立帰る既に日も暮れより、これが津太夫の替りと聞

けばソナラ津太夫はどれだけ語るかと問はねばならぬが恐らくこれだけは語れまい、否語つても聞かす事が出来まい。それは津に力がないのではない畠が違ふからそこに大変な損得がある、苟くも紋下ぢやもの駒くらひ問題にもせまいが併しなかなか左様に簡単には行かない。駒が津に及ばない所が沢山あると同時に津も亦駒に譲らねばならぬものもあらう、則ち声の中や貫禄はなか／＼駒の追隨を容さない、然も駒の燕返しは津が八転のあがきをしても駄目ぢや。時代と世話に区別すれば概して時代は津に有利にして世話は駒の得意が多い、三段目は津の畠で四段目は駒の縄張りといふても過当ではあるまい。左れば此の大文字屋の如きは当然駒が語るべきもので津には多少の無理のあるものといふを憚らない。聞蕩れて最後まで善いも悪いも恍惚として了つた。欲を云へば押しが利かぬとでも評すべき所はあれどそれは酷に過ぎる。完全な体を持って碌々語られぬ人の多い中に就て不自由乍ら斯く迄語り扱す事は激賞の価ありと信す、駒たるもの大に延べて可なり、(『浄瑠璃雜誌』二四九)

- (3) 12九年前に『鬼界ヶ島』を復活させた古靴：昭和五年一月  
(4) 15次が、大正十四年四月で↓大正十五年四月  
(5) 3四年程前の五月に、廿年振りとか言つて語つた時は、：昭和十年五月、大正四年四月